

2025 年 8 月 13 日

臨床データ利用のお願い

海南病院では、以下の研究を実施しています。本研究の対象者に該当する可能性のある方で、カルテ情報を研究目的に利用されることをご希望されない場合などお問い合わせがありましたら、お手数ですが以下の問い合わせ先にご連絡ください。

1. 研究課題名

The Effect of a Supplemental Fixation Device on Posterolateral Fragment Displacement in Unstable Trochanteric Femoral Fractures: A CT-Based Retrospective Study

不安定型大腿骨転子部骨折の後外側骨片変位に対する補助固定装置の効果：CTに基づく後方視的研究

2. 研究責任者

海南病院 整形外科 高田直也

3. 研究の概要

大腿骨転子部骨折は高齢者によくみられる骨折で、骨折後1年以内の死亡率は10～30%と高いです。中でも、小転子部骨片や後外側骨片を伴うものは不安定骨折とされ、インプラントの不具合や偽関節など術後合併症リスク上昇のおそれがあります。これまで髓内釘を用いた治療が一般的でしたが、後外側壁の骨折線とラグスクリューの挿入部の干渉により、髓内釘の軸方向や骨頭頸部角がわずかにずれ、大腿骨頭沈下のおそれが示唆されています。また、後外側骨片を有する症例では骨癒合や歩行機能の回復が乏しいことが多いが、最適な治療法は確立されていませんでした。OLSA®(Optimal Locking Solution Assist)は後外側骨片を安定化させることを目的とした新しいデバイスであり、本研究にてOLSA®の有効性を後方視的に評価することとしました。AO/OTA分類31A2.2型または2.3型の転子部骨折患者101例を対象に、髓内釘による治療を受けた患者を後方視的に分析し、術前・術後CT画像を用いてOLSA®使用群と非使用群の画像所見を比較します。

また、後外側骨片の転位量および転位量の変化(Δ =術後－術前)を測定し、後外側骨折線(Flag)の有無を評価することで、ラグスクリューの挿入を阻害するFlagによる術後の後外側壁骨折の変位への影響も本研究にて検討します。

4. 研究方法

①対象となる患者さん：2019年1月から2021年5月までに大腿骨転子部骨折に対して骨接合術の手術を受けた患者さんのうち、2019年1月から2020年5月まではOLSA®

を使用しなかった患者さん、2020 年 6 月から 2021 年 5 月までは OLSA®を使用した患者さんが対象です。

また、(1)急性片側閉鎖骨折、(2)AO/OTA 分類 31A2.2 型または 2.3 型で後外側骨片を伴う、(3)髓内釘を用いた治療を行った、の条件を満たす患者さんが該当します。

術後 2 週間以内に単純股関節 CT 検査を実施しなかった患者さんは本研究から除外します。

②使用する試料等

残余検体：なし

カルテ情報：性別、年齢、使用した手術材料、単純 X 線像の所見、CT 所見

5. 個人情報の取扱い

貴重な患者さんの個人情報は、「個人情報保護法」及び「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」など各種法令に基づいて管理します。また、研究成果は学会や学術雑誌で発表されますが、その際も患者さんを特定できる個人情報は利用しません。

6. 問い合わせ先・相談窓口

JA 愛知厚生連 海南病院 整形外科 高田直也

電話：0567-65-2511（代表）